

Title	務台理作著 現代のヒューマニズム
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.11 (1961. 11) ,p.1033(101)- 1034(102)
JaLC DOI	10.14991/001.19611101-0102
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611101-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

中島健一著

『稲作社会の発展構造』

本書は早稲田大学教授である著者の既発表の論文をまとめたものである。まず序章において著者は旧来の「地理的決定論」を批判しマルクス主義により「歴史地理学」の方法論を樹立せんとし方法論的反省を試みる。この立場に立ち、著者は日本をふくめての「東洋的社会」の停滞性と特殊性の根源を「水田営農の歴史の意義と役割」の中に求め、そこに東洋的社会を規制する重要な物質的基礎があると指摘する。この解明が本書の主要課題である。

「地理的決定論」に十分警戒を払いつつ、著者は、水田稲作農法が成立するための自然的基礎を重視し検討する。わが国稲作は「水稲」ではなしにまず「陸稲」形式で行われ、弥生式時代以降水稲経営に転化し、それによってわが国は西欧社会にみられる畑作営農の社会的条件と異なる歴史的条件を展開するに至った。この水田営農が東洋的社会の基礎であり水田営農の自然的基礎として「水」の問題を

(一七五頁)を検証している。補遺として「マ

ラヤの母系制社会」の既発表の論文がある。著者によって、東洋的社会の停滞性と後進性は終局において水田稲作営農にその物質的基礎が求められ、さらにその特質は水田土壌のもつ理化学的特殊性の中に求められた。一般的に、原理的に、このことが是認されるとしても、同じく水田稲作営農を試みる東洋的社会の異なった国々が歩んだ具体的な史的発展、わが国において地域的にみて相異った発展を、根本的には東洋的社会として総括的に把握される性格を持ちながらも、すぐれて歴史的に検討すべき必要があり、問題は著者の解明された時点よりはじまるように思われる。

水田稲作営農が終局的に「水田土壌」の理化学的特質により理解され、水田の極めて有利な側面と技術の容易さが指摘されたのであるが(九六頁)、他面水田なるが故にもつ極めて不利な側面、技術の容易さではなく困難乃至特殊性についての認識は「水」の持つ問題を解く一つの鍵であると思われる。

東洋的社会の停滞性と後進性についての研究は長い歴史をもっている。西欧社会が中世を否定し、近代資本主義をいちはやく完成し、政治、軍事、経済、文化的な優越を他の世界

に主張しその支配を肯定した時から、東洋的社会の特質と、その秘密は西欧社会の側から、西欧農業・工業との対比で、水田稲作営農の中に、いちじるしく自然的に理解されて来た。東洋社会はその呪文の中におかれて来た。今や東洋的社会は、東洋的社会の側よりみられ、西欧社会により指摘された「停滞性と後進性」とを、反省し、実践的に打破しようとする機運にある。それは宿命として理解されるのではなく、歴史的に理解される必要があるであろう。

歴史地理学の立場からの発言であるが、著者の東洋的社会の秘密を解明せんとする真剣な態度とそのすぐれた成果は学ぶべき多くの点をもっている。一読をすすめる所以である。(校倉書房・A5・二二八頁・五八〇円・昭和三十六年八月発行) 一島崎隆夫

カール・A・ウィットフォージェル著
アジア経済研究所訳

『東洋的専制主義』

本書は Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power, Yale University Press, 1959 の全訳である。か

新刊紹介

つて二十数年前アジア的生産様式論のはなやかであった頃翻訳されたウィットフォージェルの著書「支那の経済と社会」上下二巻は「ペストセラ」¹と称され、その水の理論が大規模な水の利用を管理する必要のあるモンソン地帯における「特に中国の」国家権力の発動の性格・専制的全体主義の必然性を主張して、所謂社会発展の理論と真向から対立するものであることはいうまでもない。それは又個人主義に立つ近代西欧文明による対東洋観でもあり、又旧植民地中国に対する欧米資本投入の弁明ともなっていた。

本書も又その主意の展開に外ならないが、東洋的社会という概念の下に、ヨーロッパを除くアジア大陸全般から中南米の原始的農業社会まで含み、かつそこでナチスドイツまでふくむ全体主義の問題として弾劾しようとしているのがその特徴といえる。それは著者がアメリカに亡命して以後英語で執筆した書物の始めての日本語訳として、アメリカにおける対中国観の基調を形づくる一つの要素とみることができよう。

内容はA5判六七五頁の中に根強く貫かれる「水力経済」・「水力社会」・「水力的財産」・「水力国家」→「全体的にして仁愛なき専制権力」・「全体的屈従」のモチーフのヴァリエ

ーションにつきる。著者が、国民所得総額の中にしめる農業所得がすでに50%を割り、百年來の大凶作をこえて餓死者を出さないほど増大した商品市場・労働市場をみて、しかも自然経済・専制主義の幻を捨てないのどこに原因があるであろうか。日本及び中国の学会で幾多の研究と論争を経て中国における資本主義の発達論証され解明され、更に社会主義経済への移行過程で確実に生産力構造の変化が示される今日、あたかも新しい衣裳をまとった亡霊の如くあらわれたものの意味は、中国经济研究者ならずとも一考の必要があるように思われるのである。(論争社・A5・六七五頁・二一〇〇円・昭和三十六年九月一日発行)

一平野絢子

務合理作者

『現代のヒューマニズム』

ヒューマニズムが論じられてすでに久しいが、務台氏のいわれるように、現代の人間問題を中心としたヒューマニズムの研究はまことに少ない。人間存在をその最も基本的な問題とすべき哲学も、不毛と貧血と栄養失調と

平沢 豊著

『漁業生産の発展構造』

スコラ的な現実逃避から容易に脱することが出来ない。このような時に、わが国哲学界の長老で、しかも安保闘争などにおいて衰えぬ行動意欲を示された著者が、大胆に現代の人間の条件を直視して、貧困、戦争、ファシズム、人間疎外、平和、植民地問題、原水爆問題などを通じて現代のヒューマニズムの具体的なあり方を提示されていることは、非常に貴重である。

氏の哲学は、「第三ヒューマニズムと平和論」「現代倫理思想の研究」「哲学概論」「人間と倫理」などですでに組織的に展開されており、新書判に収められた本書は、Iヒューマニズムとはなにか、II現代のヒューマニズム、III人間疎外とヒューマニズム、IV全体的人間とヒューマニズム、V人類ヒューマニズム、という構成を通じての、著者が「戦後たどってきたヒューマニズム思想遍歴のスケッチ」でもある。しかも単なる繰り返しではなく、たとえばパッペンハイムの疎外論に学んだり、安保闘争の体験が織り込まれたりして、新鮮の感を失わない。その主要な論旨は個人主義ブルジョワ・ヒューマニズムは貧困や戦争などの今日の問題を解決出来ないの

象物となっており、人類共同体をその存在の基礎としており、その最高の目的は幸福実現のためには、人類の主体として全体的人間が確立されねばならぬ、平和は相対化され、人類ヒューマニズムは特定の社会的条件へ向って対決をいどむために、思想と行動のヒューマニズムにまで上昇しなければならぬ、というような点であって、人類の幸福を目指す哲学者の誠実な学究の姿が、簡明な行文の中にしめられる。

その内容については、マルクス主義と実存哲学、あるいはルフェーブルやパッペンハイムがいり混り活用されているので、いく分折衷的の感を免れ得ない。それぞれの立場の人から見ればかなり異論もある筈だし、違った専門分野、たとえば経済学の眼からすれば喰い足りない点もある。だが、思想を失ってあまりにも形式化した現代の経済学は行動の指針をこの書から学び得るし、さらにさまざまな科学が協力して現代のヒューマニズムを一層深く掘り下げることが望ましい。(岩波新書・一九〇頁・一〇〇円)

白井 厚一

で、人類ヒューマニズムの立場に立たねばならない、人類は現実はこの地上に存在する対

第二次大戦によって壊滅的な打撃を被った漁業生産は、戦後の食糧危機に対する食糧増産政策の一翼をにない、復讐資等を通じて、戦後初期に回復をとり、さらに発展を続け、漁船の大型化は著しく進み、漁場は遠く大西洋に及ぶようになった。しかし、自然的に再生産される資源を労働対象とする漁業においては、漁業生産力発展の形態・性格は、資本制生産のもとにおいては、「労働生産性停滞傾向」によって特徴づけられる。本書は、「労働生産性停滞傾向」を「漁業資源の性格及びそれに基礎をおく漁業技術との関係」で、また「停滞化傾向」を実現する「社会経済的要因」との関連で説明し、「漁業の現実の複雑な動きを再構成」しようとしたものであり、漁業経済の研究において、充分に開拓されておらず、かつ、現在、問題とされつつある分野の研究として注目されるものといえよう。

漁業生産過程の独自の性格とかかる生産をとらえた資本の具体的運動法則を、本書は先ず、漁業資源・技術・漁業労働の三者の合体である漁撈過程の豊富な資料を以て分析する。

新技術の導入、漁業労働生産性の上昇、相対的剰余価値の造出の過程は、同時に、漁業において、著しい労働時間の延長、労働強化による絶対的剰余価値造出行程であり、また漁業労働組織の変化——家長的船頭制度の崩壊過程である。著書はかかる過程を通じて

日本生産性本部生産性研究所編

『国民のくらしと第三次産業』

第三次産業

発展した戦後の日本漁業が、しかしながら「同一漁業資源に対して加えられる漁獲努力はますます大きくなり、単位漁獲努力当りにみた場合の漁獲量は減減する傾向にある」ことから、さらに労働強化の増大がはかられ漁業労働災害、遭難の増加、また違反操業・漁場紛争が激化する等の矛盾が鋭く現われることを説明する。

たしかに、著者は、漁業生産過程の独自の性格を基礎として、日本漁業の構造、漁業資本、漁業小生産者の運動を把握しようとしたのであるが、しかし、その試みは、本書ではなお不十分な点があり、特に、日本資本主義の一生産部門である漁業の位置づけの視点および資本の運動が漁業生産過程の独自の性格の中でいかにゆめかかれてゆくかの分析が、「漁業経営階層の動向」「沿岸漁業の構造変化」の中で欠けている点等が指摘されるであろう。(未來社・A5・三七〇頁・八五〇円)

高山隆三

新刊紹介

日本は本年よりレジアー時代に入ったといつてよい。戦後十年の回復期をへて、その間朝鮮動乱による変則的なブームによる救いがあつたが、その後の沈滞期を脱して三十年より本格的な成長期をむかえた。その時の中核をなしたのは造船景気であつた。既にその前の景気を中心であつた繊維、食品は一段落となつていた。しかし造船景気はまもなく下火になつた。このとき日本は世界一の造船国になつていたが、世界一になつたことは発展の限界を示すものであつた。そして次に電機、自動車を中心になり現在もつづいている。昭和三年の不況に際しても弱電機の売上はいささかもおとろえなかつたのである。自家用車ブームは昭和三四年の岩戸景気から起つた。神武・岩戸の両好景気を通じて電機、自動車の成長は頂点に達し、現在なお成長がつづいているが、既に過去ほどの高成長は疑問であり競争も激化してきた。電機、自動車のあとをおって工作機械、土木建築、化工食品がつづいている。これらは神武景気にはあらわ

佐藤 保一